

ことわざによるトピックの要約

武田勝昭

0. 序 論

小論のねらいは、ことわざが多くの場合、当面するトピックを要約して評価を下し、談話に区切りをつけるのに使われることを、用例に基づいて立証することである。

Arewa and Dundes (1964) によれば、ことわざの上手な使い手とは、多くのことわざテキストを知っているだけでなく、それらを適切なコンテキストで使用できる人である。ことわざは本来口承されるものであるが、ことわざの口承研究は、あまり進んでいないのが実状である。¹ その大きな理由の一つに、話しことばのことわざを考察するための資料が不足していることが挙げられる。そこで、小論では次善の策として、書きことばと話しことばとの間にみられる共通性・連続性に着目したい。つまり、書きことばのことわざの用法を考察し、そこから話しことばの用法を推定するのである。まず、書きことばにおけることわざの用法が単純な形で現れる新聞の投書を取り上げ、次に、テレビのトーク番組に現れることわざの用法を分析する。そして、両者を橋渡しするための補完材料として、適宜小説や戯曲を用いる。

1. ことわざの要約機能

Taylor (1965) は、ことわざ研究の専門誌としてフィンランド文学会が1965年に創刊した *Proverbium* の巻頭論文で、次のように述べている。「ことわざは、人が生きていく上でのさまざまな問題への指針として、状況 (situation) を要約し、判断を下し、あるいは行動方針を示す」(p.7)。このことわざ観はその後、広く受け入れられてきたが、小論でもそれを支持する結果をえた。

ことわざが状況を要約するとはどういうことであろうか。まず、David Storey の戯曲 "The Contractor" から例を引いて概観しておきたい (引用中の斜体および太字による強調は筆者。以下同様)。

(1.1) MARSHALL: Some of my best friends are criminals.

(1.2) FITZPATRICK: What I can't abide is a man who can point his finger at other people but can't bear the same one to be pointed at himself.

(1.3) KAY: Some people, Fitzpatrick, have injuries that go deeper than you imagine.

(1.4) MARSHALL: Oh, very nice. [*Applauds discreetly*] He got that from a book.

(1.5) FITZPATRICK: *I mean, glass houses, Kay. Glass houses.* There's not one now you can't see here. Just by turning round. [*MARSHALL turns round.*]

(1.6) MARSHALL: *It is. I agree with that myself.*

(1.8) KAY: Do you put a price on anything, Fitzpatrick?

太字を施した 'glass houses' は *People who live in glass houses should not throw stones.* ということわざを短縮したものである。Fitzpatrick は, Marshall が自分のことを棚に上げて友達のことをあげつらったのに我慢がならず, そのことを批判する(1.1)。ところが, Marshall は反省をするどころか茶化してしまう(1.4)。そこで Fitzpatrick は, ことわざを使って, 自分の意図を手短に要約して再批判をするのである(1.5)。その結果, Kay と Marshall とは納得せざるをえない(1.6, 1.7)。そして, Kay は話題を変えてしまう(1.8)。

このことわざは, Fitzpatrick の主張を簡潔に要約しているばかりでなく, すねに傷をもつ人間が他者を批判することは許されないという価値判断を示している。自分のことばで語っても説得できなかったことを, ことわざで, しかもたったの2語で言い換えることによって, あっさりと決着をつけることができた。Arewa & Dundes (1964: 70) および Norrick (1994:147) に倣っていえば, ことわざは個人的伝達に使われる非個人的な媒体であるから, 話者は集団の背後に隠れることになる。そのことが, ひいては Leech (1983) のいう丁寧さの原則にも適うことになる。

いうまでもなく, ことわざテキストの多くは比喩表現である。上の引用に使われたことわざ比喩を, Richards (1936) のメタファー用語を使って, 図式化すれば次のようになるだろう。

媒体 (vehicle)	根拠 (ground)	主旨 (tenor)
ガラスの家に住む者が石を投げる	すね傷もつ者が他者を批判する	Marshall が友人を批判する

話者・聴者そして筆者・読者は, ことわざの比喩(媒体)を手がかりとして, 一般的真理(根拠)とトピック(主旨)との間を行きつ戻りつしながら, ことわざを用い, かつ理解するのである。² 比喩としてのことわざの特徴は, ただ単に主旨を媒体によって写像するだけでなく, そこに価値判断を加えることである。

ことわざの比喩は、1つのストーリーを短い表現の中に圧縮して語っているといえるだろう (Abrahams 1972:120)。そのストーリーの裏には、慣用的に認知された一般論が込められている。Lakoff and Turner (1989:160-213) がことわざを SPECIFIC IS GENERIC と一括し、Great Chain of Being と呼んだ所以である。ことわざはまた、フレームあるいはスキーマと呼ばれてきた既知の知識・経験が集積したもののうち、とりわけ慣用化・共有化が進んだものであるといえよう。ことわざによって、当事者達は当面するトピックについて一瞬のうちに、その意味を理解するばかりでなく、トピックについての的確な判断をも下すことができるのである。それだけに、ことわざはトピックを収束し、またトピックを転換するのに有効なストラテジーとなるのである。

2. 新聞投書のことわざ

ことわざは、ことわざとは無縁と思われてきた新聞、雑誌、テレビなどのマスメディアでよく使われる。³ ここで取り上げるのは、これまで見過ごされてきた新聞投書のことわざである。投書を取り上げる理由は2つある。投書は、まず第一に、ことわざがもっとも多く使われるジャンルの一つであり、第二に、通例、単一のトピックについて単一の主張を述べてあるため、テキストの構造が単純だからである。短い物では、テキストのミクロ構造がそのままマクロ構造となっているものさえある。

まず、投書においてことわざが使われる部位に注目してみたい。投書テキストを大まかに、見出し、冒頭部分、中間部分、結語部分に分けてみる。そして、各種の新聞(1986年1月から1999年7月までの英語圏諸国の新聞および *Daily Yomiuri*) から集めた244のことわざを、それぞれ使われている部位によって分類してみる。結果は、見出し (16=6.6%)、冒頭部分 (43=17.6%)、中間部分 (54=22.1%)、結語部分 (131=53.7%) となる。この数字から読みとれる顕著な傾向は、半数を超えることわざが結語部分で使われていることである。

結語部分で使われた代表的な例を一つ引用してみよう。"Father's Role" という見出しのついたこの投書 (*New Zealand Herald*, Nov. 11, '86) は、未婚の母となった若い女性に手を差し伸べることを、そして父親の責任を問うべきだと訴えたものである。なお、括弧を付した数字は、段落分けを表す。

(2.1) Sir,--Many thanks to Gladys Reid of Te Aroha for her well-presented thoughts on the topic of non-existent parental support in unwanted and unplanned pregnancy.

(2.2) Society is quick to deplore poor mothering skills, and although a section of the

community holds that these unfortunate little girls caught with an unexpected pregnancy should keep their babies, little help is forthcoming.

(2.3) That they are not ready financially, mentally or emotionally to take on one of society's most important tasks is not acknowledged, least of all by the so-called "father."

(2.4) No one has been enterprising enough to bring the "fathers" to accountability. *After all, it does take "two to tango."* --Yours . . .

このテキスト構成は、投書にごく一般的にみられるものといえるだろう。冒頭で他人の意見に賛意を示した後 (2.1), それを敷衍する形で、未婚の母にのみ責任を負わせている現状をクローズアップし (2.2), かつその無責任を衝き (2.3), 投書全体の意見を要約し、責任の所在を明確にする (2.4)。

結語として使われている *It takes two to tango* は、1950年代に生まれ、その後、男女同権や夫婦の協力を謳うキャッチフレーズとして使われる新しいことわざである。ここでは、このことわざに投書の内容が集約され、投書子の主張が盛り込まれている。また、ことわざを用いて、トピックを要約し、判断を下すには、結語部分がもっともふさわしい、というのは容易に納得されることであろう。

ちなみに、ことわざの発話にはそれを予告する談話標識が現れることが多い。ことわざに使われる一般的な談話標識は、前置き (*they say . . .*), 副詞 (*well*), 接続詞 (*because*) などであるが、特殊な抑揚やジェスチャーによるものもある (武田 1999)。上の引用では、斜線を施した *'After all'* を伴っており、投書子に、ことわざを主張の要約として用いるという意識が働いたことが分かる。(1.5) の引用では、*'I mean'* という談話標識がみられる。

投書の結語部分に使われることわざの用法は、ことわざの用法の基本形を示しているものと考えられる。それは、他の部位よりも使用頻度が高いからというだけでなく、トピックを要約し、判断を下すという用途に適っているからである。もし、この結論が正しければ、より複雑なテキストや談話においても、やはりこの基本形が生きているものと推測することができる。

例えば、先に中間部分と大ざっぱに分類した部位に現れることわざの用法は、結語部分の用法の変種とみなすことができる。"More About Use of 'Gaijin'" (*Daily Yomiuri*, Dec. 12, '87) という見出しのついた次の投書は、「外人」と呼ばれることに何の痛痒も感じないと主張している。*'Sticks and stones . . .'* ということわざは、大人が子どもに、いじめに遭った時の処し方を教え、また子どもがいじめに遭った時に相手に投げ

返すことばである。

- (3.1) I am a gaijin. It is as plain as the big nose on my face. I cannot hide it. The word "gaijin" does not bother me in the least.
- (3.2) Six years I lived in Hawaii, and friends as well as strangers called me a "haole." I was not offended. *Why? Because my karate instructor taught me that sticks and stones could break my bones, but names could never hurt me.*
- (3.3) There are no words worth getting offended by. Words can offend only if I choose to be offended by them. How silly to waste good energy feeling offended. The word will not go away if I ignore it, but I feel better by doing so. Come on gaijins, lighten up.

冒頭 (3.1) は投書子が外人であることと、それを意に介さないことの表明である。続いて、ハワイでの同様の体験を語った後、ことわざが、問いとその問いに対する返答を導く談話標識の '*Why? Because . . .*' および前置きの '*my karate instructor taught me*' を伴って、誇張気味に提示される。このことわざが、投書のトピックについての投書子のまとめであり、対処法についてのアドバイスでもある。

ことわざに続く部分は、その内容を敷衍したもので、省略しても投書全体の主旨は変わらない。従って、このことわざはコンテキストの内容を要約し、判断を下すということわざの基本的な機能を満たしている点において、結語部分のことわざの変種とみなすこともできるであろう。

ちなみに、上の投書の転換点において '*Why? Because . . .*' という本来なら会話で使われる対話形式がみられることから推察できるように、ことわざは、書きことばにおいても話しことばの響きを帯びていることが多い。

要約および判断という観点からすると、冒頭部分に現れることわざをどのように解釈すればよいのだろうか。次の投書で検討してみる。

(4.1) Labour Attitude

(4.2) Sir,-- **While the cat's away the mice will play.** The jet stream has hardly had time to settle down since the departure of Messrs Lange and Douglas for another overseas ramble than the proposed legislation to rationalise the State sector is being watered down by the Labour caucus . . . (*Press*, Jun. 5, 1986)

冒頭のことわざ(4.2)から読者が読みとれるのは、比喩で表された猫とネズミのストーリー(媒体)と、恐れていた相手がなくなったのを幸い残された者たちは勝手な振る舞いに及ぶという一般論である(根拠)。その限りでは、それが具体的に何を寓意したものであるのかはわからない。しかし、読者はすでに、見出し(4.1)という手がかりを与えられており、この比喩が労働党の政治動向を表していること(主旨)を知っている。つまり、冒頭部分に現れることわざは、結語部分のことわざとは逆に、まず、これから述べる内容をことわざのイメージに託して要約し、そのことに予め投書子の価値判断を下しておくのである。具体的な内容については、その後で肉付けしていく。これは書きことばの中でも投書やコラム、あるいは広告コピーなどに特徴的な、人目を引くためのレトリックである。

ちなみに、冒頭部分に使われた43例の内10例は過去の投書や記事で使われたことわざを引用したものである。これは、他者の意見をまとめて紹介するばあいに、当人の使ったことわざをそのまま引用するのが、手っ取り早くかつ有効な手段であるということ語っている。

見出しに使われることわざは、いわば上記のことわざ(4.2)と、見出し(4.1)とが逆転したもので、冒頭部分よりもさらに目を引くレトリックである。見出しとことわざは、個別の検討に値する課題であるが、ここでは、次の3つを引用しておくに止める。

(5.1) **Let the buyer beware** (*New York Times*, Mar. 13, '88)

(5.2) **Out of the Mouths of Babes and Suckling** (*New Zealand Herald*, Sep. 16, '86 <Out of the mouths of babes . . . >)

(5.3) **IF THE CAP FITS** (*Irish Times*, Mar. 3, '99 <If the cap fits, wear it.>)

これらは、他のことわざと同様、投書本体を要約し判断するという2つの役割を担っている。Abrahams(1968:44)およびBurke(1973:296)は、ことわざとは、人々が状況につけた名前(name)だといった。見出しのことわざはまさに投書に付けられた名前に他ならない。

すでに述べたとおり、冒頭部分や見出しはことわざの用法としては、投書などの書きことばに固有のものである。話しことばにおいて、ことわざで見出しをつけたり、ことわざで口火を切ったりすることは、あり得るとしても、講演、討論会、祝辞などの特殊なケースに限られるであろう。

ここで、投書のことわざでもっとも一般的なものについて再確認しておきたいのは、

ことわざは (a) テキストのトピックに沿って内容を要約し, (b) その内容に話者の判断を下し, (c) 使用される位置としてはテキストの結語部分がかつとも適している, ということである。

3. 書きことばから話しことばへ

投書は, 単一のトピックでテキストが構成されているという点で, テキスト・談話としてはやや特殊な部類に属する。では, トピックが次々と展開していくテキスト・談話において, ことわざはどのような現れ方をするのであろうか。筆者は, ことわざはテキスト・談話において話者が当面のトピックを要約し, かつそのトピックに判断を下すという, 投書における同様の役割がみられると考える。

ここでは, 話しことばに目を転じて, テレビのトーク番組に現れたことわざを考察してみよう。初めに引用するのは CNN の人気番組 "Larry King Live Weekend" で, ホストの King が, クリントン大統領を弾劾裁判に追い込む原因となった Monica Lewinsky の両親と対話した番組 (Aug. 21, '99) の終了間際のやり取りである。⁴

(6.1) KING: And anything you want to say?

(6.2) DR. BERNARD LEWINSKY: Well, I think . . .

(6.3) KING: We've only got, like, 30 seconds.

(6.4) DR. BERNARD LEWINSKY: . . . that we have seen the worst in people, and the absolute best in people. And for the people that have supported us, we really are grateful from the bottom of our heart -- the support. The people that have been the worst, we just don't deal with them.

(6.5) BARBARA LEWINSKY: **And just don't -- when you don't walk in someone's shoes, you have no idea what it feels like.**

(6.6) KING: Thank you.

(6.7) BARBARA LEWINSKY: **Don't judge people.**

(6.8) KING: Thank you both very much.

両親は司会者の King から最後に一言と促され (6.1), 父親が事件以来の人間模様を語る (6.4)。続いて母親が2つのことわざを使って話しを締めくくる。(6.5) でいいかけて途中で切り, 再び (6.7) で言い直したことばは聖書のよく知られた *Judge not, that ye be not judged.* (人を裁くな, 裁かれないために) という一節である。(6.5) で使っ

たもう1つの表現は通常 *Wear my shoes and you'll know where they pinch.* という定形で使われる。ここで両親が語っているのは、いうまでもなく世間の非難にさらされた者の心境である。母親が2つのことわざに託したのは、当事者にしか分からない痛みと、人が人を裁いてはならない、という偽らざる気持ちとである。

"Larry King Live" (Aug. 13, '99) からもう一つの例を引用する。司会者 King が4人のプロレスラーにプロレスの内幕をあれこれと聞き出しながら番組が進行する。トピックがつきつぎと転換する中で、King はゲストの一人であるレスラーの Goldberg に試合での身の安全について質問をする。引用はトピックの冒頭から始める。

(7.1) KING: OK. Goldberg are you ever worried about safety based what happened to Owen?

(7.2) GOLDBERG: Oh, Larry, I'm always worried about safety. You know, I've been hurt so many times -- I've actually been hurt more in wrestling in the last two and a half years than I ever was playing football. Everybody is up on the fake and staged syndrome, but I'm here to tell that you can only fake so much, OK, and . . .

(7.3) KING: But have you ever been asked . . .

(7.4) GOLDBERG: Larry, I wish you could see the back of my head. (LAUGHTER)

(7.5) PAGE: Look at the scars on his head.

(7.6) KING: Have you ever been asked to do something, like come down on a rope or shot out of a cannon, that you may consider dangerous.

(7.7) GOLDBERG: I've never been asked it yet, no. **You know, I'll cross that bridge when I come to it. Hopefully, I won't come to it.**

(7.8) KING: What about you D.D.P., have you ever feared for your safety, over a gimmick?

質問を受けた Goldberg は、身の安全は常に心配で、八百長にも限界があり、生傷がたえないと答える (7.2, 7.5)。King が、危険な技を求められたことはあるかと新たな質問を投げかける (7.6)。その返答にことわざが使われる (7.7)。太字で示した部分は、*Do not cross the bridge till you come to it.* (取り越し苦労はするな) ということわざをもじったもので、危険な技をやらざるを得なくなればやるだろうが、願わくば、ご免こうむりたいという意味である。プロレスラーの軽妙な返答は会話に一つの決着をつけたといえるだろう。ホストの King はそれ以上の返答を求めず、別のゲストに水を向ける (7.8)。

対話では複数の参加者がいるために、まとめと判断の役目をだれが果たしてもよい。次の引用は、ゲストを交えて洒脱な司会で世相を論じる ABC テレビの番組 "Politically Incorrect with Bill Maher" (Jun. 10, '99) の中で、ゲスト出演者の一人が、10才の女兒が同級生から性的嫌がらせを受けたことを論じた下りである。

(8.1) Heather: I think in this case, if I remember correctly, the parents had gone to the school several times.

(8.2) Bill: Yes.

(8.3) Heather: And the school had continuously ignored it. It was interfering in the little girl's --

(8.4) Bill: "**Boys will be boys,**" is what they said.

(8.5) Heather: *Right But* it was interfering with the little girl's --

(8.6) Bill: Yeah, sure.

ゲストの Heather の説明が要領を得ないために (8.1, 8.2), ホストの Bill がその意図を汲み取って 'Boys will be boys.' (いたずらするのは男の子の常) ということわざを用いて、学校の態度を簡潔にまとめたわけである(8.4)。このように、会話の当面の話題をことわざによってまとめるのは、ことわざのもっとも基本的な用法の一つである。上の引用では、番組のスムーズな進行という司会者の役割から、相手の会話の内容を引き取った形で話者がまとめている。

(6) - (8) にみられることわざは、トピックを要約し判断を下すという点において、投書のことわざと同じ特徴を具えているといえるだろう。すでに引用した, "Larry King Live (Weekend)" と ABC の "Politically Incorrect with Bill Maher" に CNN の "Talk Back Live" を加えた3つのトーク番組のトランスクリプトから採取した17個 (採取期間は1999年6月から同年8月まで) のことわざを検討してみると、トピックの大小の差はあるものの、すべてトピックの要約であり判断を下すために使われている。

4. ことわざによるトピックの転換

メイナード (1993:141) は日本語の会話において話題を転換する際に用いられるストラテジーとして、(a) 会話の一時中止、(b) まとめや評価をする表現、(c) 限られた反応、(d) テーマ転換を示唆する文副詞、接続詞等の4種類を挙げている。これらは日本語ばかりでなく英語にも妥当するとみてよいであろう。彼女は (b) の「まとめや

評価をする表現」が、Garfinkel and Sacks (1970) と Heritage and Watson (1979) のいう formulation に当たるとして、前者から「会話中当事者がしていること、話している内容を数語でまとめて言い変えたものである」という定義を引用している。さらに続けて自身のことばで、「会話の当事者が、そのテーマ領域を振り返って、まとめたり評価したりすることによってその領域に終わりを告げることができる」(p.143) と言い添えている。

また、トピック転換のストラテジーについて Drew and Holt (1995, 1998) の興味深い報告がある。電話での会話を資料に使った彼らの研究によれば、慣用的な比喩表現つまりイディオムは、会話の転換点において、トピックをまとめる役割を担って使われ、それ故にトピックを収束させる機能をもっている。しかも、イディオムのこの現れ方は規則的で、次のような一般化が可能であるという (1998:506)。

- 1 → 話者 A: 比喩的要約
- 2 → 話者 B: 同意 (または他の隣接表現)
- 3 → 話者 A: 同意/承認
- 4 → 話者 A/B: 次のトピックを導入

ことわざは、比喩的であること、総括的意味をもつこと、評価を含むことなどの特性において、イディオムに隣接しあるいは包含される表現である。⁵ Drew and Holt (1998:514)の分析例の中に *the more the merrier* ということわざが見られることから、彼らの転換ストラテジーの図式は、概ねことわざにも妥当すると考えてよいだろう。

テレビのトーク番組では、時局的なトピックをめぐって対話や討論が進行することが多いために、参加者の間で価値判断が分かれることがある。そのような場合には、ことわざによるトピックの要約と判断が、批判にさらされ、トピックの転換がうまく運ばないこともある。⁶ ことわざによるトピックの転換が Drew and Holt の図式が妥当する例は小説や戯曲では枚挙にいとまがない。冒頭に引用した Storey の戯曲は、話者こそ3人ではあるが、そのよい例である。まず、Fitzpatrick が *Glass houses* ということわざによってトピックを要約すると (1.5), Kay が、'That's very fine, Fitzpatrick.' (1.6) と同意を示す。それを受けて、Marshall は 'It is. I agree with that myself.' (1.7) と合意を示さざるをえない。そして Kay はトピックを変えて 'Do you put a price on anything, Fitzpatrick?' と切り出す。

ことわざを使ったトピック転換の例としてもう1つ、Laura Ingalls Wilder, *By the Shores*

of *Silver Lake* の一節を引用しておきたい。ワイルダー一家の主が宅地分譲の申し込みに行き、行列の大混雑の中であやうく喧嘩に巻き込まれそうになりながらも首尾よく宅地を入手した経緯を、家族に興奮気味に語る下りである。

(9.1) "Was he hurt?" Mary asked anxiously.

(9.2) "Not a scratch. He just started that fight. He got out of it as quick as I ducked inside and started filing my claim. But it was some time before the crowd quieted down. They--"

(9.3) "All's well that ends well, Charles." Ma interrupted.

(9.4) "I guess so, Caroline," Pa said. "Yes, I guess that's right. Well, girls, I've bet Uncle Sam fourteen dollars against a hundred and sixty acres of land, that we can make out to live on the claim for five years. Going to help me with the bet?"

いざこざの顛末をリアルに語ろうとする夫に (9.2)、妻は 'All's well that ends well.' という夫の口癖を使って、子どもの手前を考えて、話題を切り上げなさいと信号を送る (9.3)。夫は、'I guess so, Caroline. Yes, I guess that's right.' と同意を示さざるをえず、'Well, girls ...' と切り出して話題を転換するのである (9.4)。

ところで、この場面の後には、もう1つのことわざを使った会話が続いている。

(9.5) "Oh, yes, Pa!" Carrie said eagerly, and Mary said, "Yes, Pa! gladly, and Laura promised soberly, "Yes, Pa."

(9.6) "I don't like to think of it as gambling, " Ma said in her gentle way.

(9.7) "Everything's more or less a gamble, Caroline," said Pa. "**Nothing is certain but death and taxes.**"

'Nothing is certain but death and taxes.' はやはり夫の口癖であるが、人生の転機を迎えての決意を表したことばでもある。それはまた同時に、妻へのお返しのことばでもある。5年間で土地の払い下げを受けてみせるという、叔父との賭を子どもに得意げに語る夫を制した妻に対して、こんどは言いなりにならないという信号を送ったのである。また、小説のストラテジーとしてみると、これは章を締めくくる結語でもあるのだ (9.7)。

5. 結 び

投書に使われることわざの分析を通して、ことわざは状況を要約し、かつ価値判断を下すという半ば定説化したことわざ観が妥当であることを検証した。そして、投書の中でももっとも頻繁に現れる結語部分のことわざが、ことわざ用法の基本形を示していると考えた。この基本的な用法は、書きことばばかりでなく、話しことばのことわざにも共通する用法であることを、トーク番組の対話トランスクリプトや小説によって確かめることができた。また、トピックを締めくくり、判断を下す役割を持っているが故に、イディオムと同様に、トピックを転換するための有効なストラテジーとして機能しうるのである。

ここで、今後に残された課題をいくつか列挙しておきたい。1つは、一次資料に基づいた会話のことわざを入手することである。小論で利用したトーク番組は、時間的、社会的制約のきついメディアでの会話で構成されている。自由な会話に現れることわざの資料が求められる所以であるが、当面そのような資料が整うことはあまり期待できない。そこで、擬似的な資料ではあるが、小論で補完的に用いた小説や戯曲、さらに映画のシナリオなどを用いることが考えられる。小論で最後に引用したWilderのいわゆる Little House のシリーズ9冊はそのような資料として利用することができる。平均して1冊に10個以上のことわざが使われており、しかも言語集団の知恵の集積としてのことわざが、家族というもっとも小さな言語集団の中で、骨太に描かれているからである。ワイルダー一家のことわざは、家族が繰り返し出会う状況を要約し、判断を下し、かつ行動方針を確認しあうための共有財産なのである。そこでは、ことわざを口にする家族は、Arewa and Dundes (1964:70) がいみじくもいったように、ことわざを伝達するための媒体 (vehicle) と化しているのである。

もう1つの課題は、ことわざの語用論研究にどのような理論的な枠組みを利用するのが適切であるかということである。ことわざは、単に意見陳述をするために発話されるのではない。相手の同意を求め、相手をねじ伏せ、相手の口を封じるために発話するのである。小論で扱ったことわざの用法ないし用途は、いわゆる発話媒介行為に属する。ことわざを発話することは社会的な行動であるから、言外のコンテクストからも厳しい制約を受けている。従って、ことわざの使用に際してはどのような適切性の条件を満たす必要があるのか、といった事柄もほとんど未知の分野として残されているのである。

- Everaert, M., E. Linden, A. Schenk and R. Schreuder eds. 1995. *Idioms: Structural and Psychological Perspectives*. Hillsdale, NJ and Hove, U.K.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Fernando, C. 1996. *Idioms and Idiomaticity*. Oxford: Oxford University Press.
- Garfinkel, H. and H. Sacks. 1970. "On Formal Structures of Practical Actions." In J. C. McKinney and E. A. Tirayakian eds. *Theoretical Sociology*, 338-366. New York: Appleton-Century-Crofts.
- Heritage, J. C. and D. R. Watson. 1979. "Formulations as Conversational Objects." In G. Psathas ed. *Everyday Language*, 123-162. New York: Irvington.
- Honeck, R. P. and R. R. Hoffman eds. 1980. *Cognition and Figurative Language*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Jackendoff, R. 1995. "The Boundaries of the Lexicon." In M. Everaert *et al.* eds. 1995, 133-165.
- 小泉保. 1997. 『ジョークとレトリックの語用論』東京: 大修館書店.
- Lakoff, G. and M. Turner. 1989. *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: University of Chicago Press.
- Leech, G. N. 1983. *The Principles of Pragmatics*. London and New York: Longman.
- Makkai, A. 1972. *Idiom Structure in English*. The Hague: Mouton.
- メイナード, 泉子・K. 1993. 『会話分析』東京: くろしお出版.
- Mieder, W. 1989. *American Proverbs: A Study of Texts and Contexts*. Bern: Peter Lang.
- Mieder, W. 1993. *Proverbs Are Never out of Season: Popular Wisdom in the Modern Age*. Oxford: Oxford University Press.
- Mieder, W. 1997. *The Politics of Proverbs*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Mieder, W. and A. Dundes eds. 1994. *The Wisdom of Many: Essays on the Proverb*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Norrick, N. R. 1980. "Nondirect Speech Acts and Double Binds." *Poetics* 10, 33-47.
- Norrick, N. R. 1994. "Proverbial Perlocutions: How to Do Things with Proverbs." *Grazer Linguistische Studien* 17-18 (1982), 169-83. Also in W. Mieder ed. *Wise Words*, 143-157. New York: Garland.
- Richards, I. A. 1965. *The Philosophy of Rhetoric*. New York: Oxford University Press.
- Seitel, P. 1969. "Proverbs: A Social Use of Metaphor." *Genre* 2, 143-161. Also in W. Mieder and A. Dundes eds. 1994, 122-139.
- Seitel, P. 1977. "Saying Haya Sayings: Two Categories of Proverb Use." In J. Sapir and C. Croker eds. *The Social Use of Metaphor: Essays on the Anthropology of Rhetoric*, 75-99. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 武田勝昭. 1992. 『ことわざのレトリック』海鳴社.
- 武田勝昭. 1999. "Discourse Markers as an Index of Proverb Use" 『和歌山大学教育学部紀要—人文科学—』第49集, 61-72.
- Taylor, A. 1965. "The Study of Proverbs." *Proverbium* 1, 1-10.
- Yankah, K. 1989. *The Proverb in the Context of Akan Rhetoric*. Bern: Peter Lang.

注

- 1 ことわざの語用論的研究でもっとも成果を上げてきたのは、アフリカ各地の実証的なことわざ研究で、ガーナのアカン族の口承ことわざを理論的、実証的に研究した Yankah (1989) がよく知られている。
- 2 ことわざ比喩の構造については Seitel (1969, 1977), Honeck (1980), 武田 (1992 : 137-195), 小泉 (1997:182-188) を参照。
- 3 詳しくは, Mieder (1989, 1993, 1997) を参照。彼の関心は主としてことわざの社会的あるいは社会史的側面にある。
- 4 ことわざは, あからさまに表現しにくいトピックを婉曲に語って苦境を回避するのに有効なストラテジーの1つである (Norrick 1980 を参照)。小論で取り上げたスキヤングル (6.1-8), レスラーが危険を恐れること (7.1-8), 性的嫌がらせ (8.1-6) などはその例である。
- 5 例えば Makkai (1972), Becker (1975), Jackendoff (1995), Fernando (1996) などは, ことわざをイディオムに包含されるものと考えている。
- 6 話者間の意見の食い違いによってイディオムによるトピック転換が失敗するケースについては Drew and Holt (1998:512-518) を参照。
- 7 文学作品に現れることわざの目録作りが Bryan and Mieder (1994, 1995, 1997他) の二人によって進められた。また, 二人による政治家のことわざ目録もある。これらはことわざの用法研究に多大の貢献ををすると思われる。

参考文献

- Abrahams, R. D. 1968. "A Rhetoric of Everyday Life: Traditional Conversational Genres." *Southern Folklore Quarterly* 32, 44-59
- Abrahams, R. D. 1972. "Proverbs and Proverbial Expressions." In R. M. Dorson ed. 1972. *Folklore and Folklife*, 117-127. Chicago: University of Chicago Press.
- Arewa, E. O. and A. Dundes. 1964. "Proverbs and the Ethnography of Speaking Folklore." *American Anthropologist* 66, 70-85.
- Becker, J. D. 1975. "The Phrasal Lexicon." *BBN Report* No.3081, 1-35.
- Bryan G. and W. Mieder. 1994. *The Proverbial Bernard Shaw: An Index to Proverbs in the Works of George Bernard Shaw*. Westport, CT and London: Greenwood Press.
- Bryan G. and W. Mieder. 1995. *The Proverbial Eugene O'Neill: An Index to Proverbs in the Works of Eugene O'Neill*. Westport, CT and London: Greenwood Press.
- Bryan G. and W. Mieder. 1997. *The Proverbial Charles Dickens: An Index to Proverbs in the Works of Charles Dickens*. Bern: Peter Lang.
- Burke, K. 1973. *The Philosophy of Literary Forms*. 3rd. ed. Berkeley, CA: University of California Press.
- Drew, P. and E. Holt. 1995. "Idiomatic Expressions and Their Role in the Organization of Topic Transition in Conversation." In M. Everaert *et al.* eds. 1995, 117-132.
- Drew P. and E. Holt. 1998. "Figures of Speech: Figurative Expressions and the Management of Topic Transition in Conversation." *Language in Society* 27, 495-522.